

デンマークにおける学力テストの実践と評価

The Objectives of Assessment in Denmark: An Analysis through Academic Examinations

市川 桂

ICHIKAWA Katsura

デンマークでは、PISA ショックを経て全国学力テストの導入などの教育改革が行われている。しかし、学力テストの結果は学校の序列化にはならず、教員の授業改善に活用されている。中でも注目すべきは、義務教育修了学年である9年生対象の学力テストが口頭試験を含めて行われているということである。本稿は、デンマークの学力テストの事例を概観するとともに、学力観や評価観について(1)教育の目的、(2)学びの捉え方と測定方法、(3)教員の役割の3つの側面から考察を行った。

キーワード：デンマーク、学力テスト、口頭試験、評価

1. はじめに

本研究は、『アメリカ教育改革の最前線—頂点への競争—』(北野・吉良・大桃編著)を2012年に刊行するにあたって、執筆者が継続して行ってきた学力テスト政策研究と、2016年度から2カ年にわたって行ってきた若手研究(B)「アメリカにおける教育改革の変容とテスト政策の展開—コモン・コアに焦点を当てて」(課題番号16K17380)で実施したスタンダード研究を発展的に研究するものである。

これまでの一連の研究において、学力測定は多肢選択式テストの実施が前提となっていた。このような形式のテストによって何を測定するのか、子どもにどのような能力を身に付けることを教育の目的とするのか、各国で学力テスト政策に差異があるのはなぜか、という疑問が研究を進める中で生じてきたため、これらについて検討するために学力や評価について他国とは一線を画する形で実践しているデンマークの事例の実践を研究することが重要であると考え、本研究を着想した。

デンマークでは、日本と同様にPISA ショックを経て、2010年に全国学力テストが導入および実施されている。しかし、学力テストの結果は学校の序列化とならず、各学校での授業改善に活かされている。中でも注目すべきは、義務教育修了学年である9年生対象の学力テストが口頭試験を含めて行われているということである。子どもが義務教育の中で身につけるべき力として、他者とのコミュニケーションを通じて自らの考えを深めていくことを掲げ、解答がひとつではない課題に取り組む能力を測定するという取り組みは、これからの社会における教育をどのように考えるのかということについての指針となり得

る。

本稿は、研究の端緒としてデンマークの学力テストの事例を概観することに重点を置くとともに、学力観や評価観について(1)教育の目的、(2)学びの捉え方と測定方法、(3)教員の役割の3つの側面から考察を行うことを目的とする。

2000年代以降、日本では、国際学力調査の影響を受けて初等中等教育段階においてキー・コンピテンシー(OECD-DeSeCo、2003年)やリテラシー(OECD-PISA、2000～2015年)の育成が目指されている。しかし、現行の教育評価は国語、算数・数学、理科の得点力に焦点化される傾向にあり、新しい能力観に対応した評価が模索されている状況であることが、松下の研究によって指摘されているところである¹。

「世界で最も幸福な国」として知られるデンマークにおいても、日本と同様、OECDが実施する国際学力調査であるPISAの結果に影響を受けて教育政策を転換させている。2003年のいわゆるPISAショックによって、2010年からは16歳までの義務教育期間中に全国学力テストを実施することが決められた。日本と大きく異なるのは、この学力テストの導入以前から、デンマークでは9年生を対象に口頭試験を主とした全国学力テストが実施されているという点である。学力の測定に関しては、梶田叡一(1994年)²による「確かな学力」の氷山モデルで、思考力と関心・意欲はそれぞれ、見えにくい学力、ほとんど見えない学力に位置付けられている。また、スペンサーら(1993年)³による同心円モデルでは、中核に位置する性格的特性および動機は潜在的で測定や育成が困難であることが示されているが、口頭による学力テストを通してデンマークの教育実践に光を当てれば、新たな学力の捉え方が浮かび上がる可能性がある。

デンマーク・オーフス大学のWandall(2013年)⁴は、コントロールとアカウントビリティを学力テストの結果の用途とし、分析することを学力テストの目的としているアメリカとは対照的に、デンマークは子どもの学びを測定することを学力テストの目的としており、教育改善のために結果を用いていることを明らかにしている。

そこで、本稿ではデンマークの学力テストに焦点をあてて、学力向上を標榜する取り組みの背後にある学力観および評価観について考察を行う。この研究の成果として、日本の学校における学力の評価の実践に対しても示唆を得ることができる。

2. デンマークにおける教育の概要

デンマークは2014年の国連世界幸福度調査で第一位になるなど、国民の幸福度の高さとともに、国民が納める高額な税金によって支えられている高福祉国家としてよく知られている。人口は約570万人(2016年)であり、2007年に公的組織が再編成された後は、5つの地域と98の地方自治体から構成されている国である。このとき、274あった地方自治体が98にまで統合されたことによって、公立学校の規模が大きくなるなど、教育行政への影響も少なくなかった。デンマークの公教育システムは地方分権化されており、各地方自治体がフォルケスコレを監督し、私立学校は教育省が管轄している。2017年の移民法の改正後はヨーロッパで最も移民が入国しにくい国となったが、全就学者のおよそ10%はトルコ、イラク、レバノンなどのバックグラウンドを持つ子どもで占められている⁵。

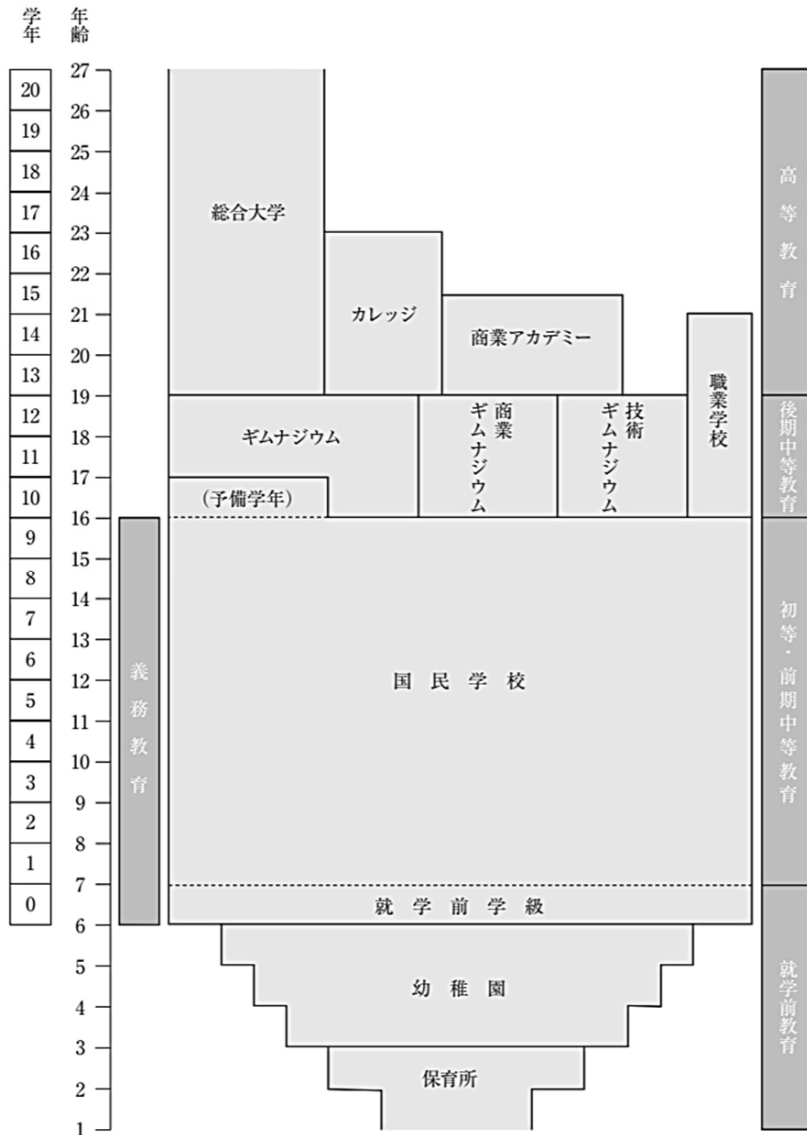


図 1 : デンマークの学校系統図

文部科学省 (2017) より抜粋.

図 1 はデンマークの学校系統を示したものである。就学前教育は 6 か月から 2 歳児を対象にした保育所と、3 歳から 5 歳児を対象にした幼稚園で実施される。義務教育年限は 10 年で、多くの子どもは 6 歳となった 8 月にフォルケスコレ（国民学校）の 0 学年クラスに就学して 9 学年で義務教育を終える。就学前教育の 1 年が義務教育に加わったのは、2009 年の 8 月のことである。義務教育学校には公立および私立があり、ホームスクーリングも認められている。約 8 割の子どもはフォルケスコレと呼ばれる小中一貫校の公立学校に通う。中等教育段階と高等教育段階の間にはギャップイヤーとして 10 学年が設置されており、教育の普及状況は表 1 のとおりである。

表 1 : 教育の普及状況

教育段階	粗就学率	男	女
就学前教育	95.8%	96.3%	95.3%
初等教育	101.8%	102.4%	101.2%
中等教育	129.1%	127.3%	131.1%
高等教育	81.1%	68.9%	94.0%

UNESCO (2016) をもとに執筆者作成.

2016年のデータによると、初等教育および中等教育への子どもの在籍率は100%を超えている。これは、通常の年齢よりも早いまたは遅い入学や留年などの理由による在籍者を含むためである。高等教育段階になると、在籍者の年齢のばらつきはさらに大きくなる傾向にある。デンマークは高等教育も無償であり、図1の中では描かれていない単位や学位を出さない全寮制のフォルケホイスコーレ⁶の存在によって、生涯学習社会が実現されている。

3. 全国学力テストと義務教育修了テスト

デンマークの義務教育における学生の評価は、学校と教員によって開発・発展してきた歴史的背景がある。1993年には、教員が継続的に子どもの学びを評価することが法的要件となり、さらに強化された。2003年に掲げられた「義務教育における国家共通目標 (The national Common Objectives for compulsory education)」は、評価の基本的事項を示したもので、義務教育段階の最終学年である9学年における目標をはじめ、各学年・各科目における目標が明記されている。2006年以降の教育政策では、義務教育段階に包括的な評価を導入しようとしている。その一環として、9学年における義務教育修了試験が位置付けられ、さらに、2、3、4、6、7、8学年の特定科目において、国家共通目標に基づいた全国学力テストを2010年から実施している。さらに、「個別プラン (Individual Student Plans)」の作成が必須となっており、子ども一人ひとりの学習進捗状況をより体系的に文書化している。

2006年からテストの開発とパイロットテストが重ねられてきたコンピュータ・ベースの全国学力テストは、2010年3月からすべてのフォルケスコーレを対象に実施されるようになった。この学力テストは多肢選択式となっており、毎年数科目が実施対象になっている。具体的には、2、4、6、8年生のデンマーク語、3年生および6年生の算数、7年生の英語、8年生の生物、地理、物理・化学である⁷。それぞれの科目において、3つの分野・領域に関わる問題が出される。この分野・領域はプロファイルエリアと呼ばれ、例えば、デンマーク語のテストにおいては、言語理解、デコーディング (音と文字の対応)、読解のプロファイルエリアから出題される。

表 2：全国学力テストにおける各科目のプロファイルエリア

科目	プロファイルエリア 1	プロファイルエリア 2	プロファイルエリア 3
デンマーク語	言語理解	デコーディング	読解
算数	数と代数	幾何	身近にある数学
物理・化学	エネルギー	事物、現象、物質	応用と評価
英語	読解	ボキャブラリー	言語と慣用法
地理	自然地理	文化地理	応用地理
生物	生物の構造	生物相互作用	応用生物

Skolestyrelsen (2010) をもとに執筆者作成。

システム面では、項目応答理論に基づいて子どもの潜在的な能力レベルに合わせて出題されるようになってきている。つまり、テストの問題は、前のテスト項目で子どもが正答したかどうかに従って順次選択される。正しく答えれば、より難しい問題が出されることになり、解答が間違っていると、次に出題されるのは比較的簡単な問題になる。このことによって、より正確に子どもの能力を測定することができるのである。全国学力テスト実施の翌日には、教員に試験の結果がフィードバックされるため、授業改善に役立てることができる。結果はオンラインでアクセスコードを入力することで見ることができ、担当教員だけでなく校長も閲覧可能である。結果は次に挙げるような形式で表示される⁸。

(1) 教員のための概要：教員が担当しているクラスと子どものグループの結果の概要。結果は、各プロファイルエリア内の各クラスの全体的なスコアと、全体的なスコア（プロファイルエリア全体にわたる評価）として表示される。

(2) すべての子ども：各プロファイルエリアでの子どもの得点の結果とステータスの要約と、それぞれの子どもの包括的な評価。

(3) 個々の子ども：各プロファイルエリアのテストに関する、正解、間違い、無回答、解答するのに要した時間に関する個々の子どもの情報。各情報について、タスクの難易度（1～5のスケールで、5が最も難しい）、トピックエリア（コア・アカデミック・コンテンツ）、ある問題に答えるために要した時間が提示される。

(4) 教員が指定したグループ：教員は特定のグループの子どもを指定し、その結果の概要を見ることができる。男子あるいは女子、教育戦略やプログラムに沿って指定することができる。このような情報によって、教員はプロファイルエリアの平均以上または平均値が一貫している子ども、またはプロファイルエリアまたはトピックに弱みまたは強みを持つ子どもを特定し、評価を確認できる。このような情報は、教員の指導計画に盛り込まれることで、子どもの学習を促進したりサポートすることができる。また、教員指定グループの機能は、異なる教育戦略の有効性を追跡調査できるという可能性を持つ。

さらに、教員は、全体的なテストとプロファイルエリアによる子どものパフォーマンスを説明するために、保護者のための要約シートを印刷することもできる。これは保護者に対して結果を伝達する際に利用されている。イギリスのようにリーグテーブルで学校が序列化されることはなく、アメリカのように教員評価に結び付ける動向もない。子どもの学習状況を把握し、授業改善へとつなげることが全国学力テストの目的なのである。

9年生の修了時には、義務教育修了試験が全員を対象に実施される⁹。この試験は高等学校への進学試験とは別に実施されるものである。試験では、学校で教えられてきた様々

な科目において、口頭試験、レポート、プロジェクト・ベースの課題を含む複数の評価方法で義務教育の最終目標を達成したか否かが評価される。9年生は全員、5つの必須科目（デンマーク語の口頭試験、デンマーク語の筆記試験、数学の筆記試験、英語の口頭試験、物理・化学の口頭試験）と、人文科学（英語、歴史、社会科、キリスト教の筆記試験、あるいは、フランス語またはドイツ語の任意科目の口頭および筆記試験）と科学（地理または生物学）の2つのブロックからひとつずつランダムに選ばれた2科目の、合わせて7つの試験を受けなければならない。すべての筆記試験は、国が定めた採点のガイドラインを使用してその子どもを教えている教員が採点し、地方自治体の教育委員会がモニターすることになっている。別の学校や地方自治体から派遣された教員や担当者が、英語、フランス語またはドイツ語の試験をチェックすることもある。

英語の口頭試験では、2つの課題が課せられる。ひとつ目は、選択したトピックに沿って5分以内で実施するプレゼンテーションである。ふたつ目は、特定のトピックについて8分以内で実施する会話・インタビューである。口頭試験の実施前に、複数のトピックを含む3つ以上のメインテーマに合わせて教員と生徒が参考資料を集め、生徒はトピックをひとつ選択する。例えば、メインテーマ「アメリカにおける生活」のトピックには「黒人の命は重要（Black Lives Matter）」ムーヴメント、アノニマス（インターネット上の活動家集団）、アメリカンドリーム、死刑、十代の妊娠が含まれる¹⁰。生徒は参考資料を選んで、教員の指導を受けながらプレゼンテーションの準備を行い、口頭試験前日までに図2のようなプレゼンテーションの要旨を作成し、生徒および教員の署名を記し、提出する。

クラス・名前：●組 ○○ ○○	
テーマ：現代の若者	選んだトピック：肥満
1. このトピックを選んだ理由	
(1) 家族 (2) 鑑賞した映画 (3) 個人的な興味・関心	
2. 肥満および摂食障害の種類	
・食べ過ぎによる肥満、拒食症、過食症	
3. どのような人が、なぜ摂食障害になるのか	
・ケーススタディ	
4. 誰にとっての問題で、どのように解決するべきか	
・個人的な問題	
・社会が原因である可能性もあるのではないか	
・学校給食	
・テレビ番組	
参考資料：モーガン・スパーロック監督作品 映画「スーパーサイズミー」	
ジェイミー・オリバーのブログ http://www.jamieoliver.com/diary/	
イギリスの学校給食 http://www.channel4.com/life/microsites/J/jamies_school_dinners/fom/index.html	
生徒の署名：	教員の署名：

Dimova (2013) をもとに執筆者作成。
図 2：プレゼンテーションの要旨の例

試験官2名（生徒を教えている教員とチェック担当の他校の教員）による評価は7分以内で行われるため、一人あたり20分以内で終了する。プレゼンテーションの内容についての質問は生徒を教えている教員から行われ、他校の教員は明確化するための質問のみすることができる。会話・インタビューの課題では、生徒は図3のようなカードを1枚選び、そのカードに記載されているトピックに関連した質問やイラスト・写真に沿って2名の試験官と議論することが求められる。このとき、生徒が議論を主導しなければならない。



Dimova (2013) をもとに執筆者作成。

図3：会話・インタビュー課題で用いられるカードの例

試験官による評価は表3で示したように、コミュニケーション能力、言語能力、準備および習得状況、文化と社会の理解といった項目について、-3点から12点までのスケールで採点が行われ、2名の試験官による協議を経て最終的な評価がつけられる。他校の教員は、試験終了後に参考資料やトピックの選択、会話・インタビュー課題での所見、評価などについての意見をまとめたレポートを作成し提出しなければならない。

表 3 : 英語の口頭試験の評価表

生徒の名前:		12	10	7	4	2	0	-3
全体—該当点数の欄にプレゼンテーションは p、会話は s を記入する。								
1	トピック・テーマに関連した、多様な語句や語彙を活用している。							
2	文法を正しく使用している。							
3	正確かつ一貫性のある言葉で表現している。							
4	コミュニケーション戦略を用いている。							
5	発音が正しく明確である。							
プレゼンテーション								
6	選んだトピックを提示し、考察している。							
7	調べた資料に基づいた知識を示している。							
8	対象国・地域の文化的・社会的な状況に関する知識を示している。							
インタビュー								
9	よく聴き、反応し、会話を主導している。							
10	自らの視点や態度を示している。							
11	トピックに関連した質問について自らの知見を示している。							

Styrelsen for Undervisning og Kvalitet (2018) p.14をもとに執筆者作成.

義務教育修了試験で特徴的なのは、授業で勉強してきた内容を正確に答えられるかどうかではなく、ツールとして習得内容を用いているか(表3の評価項目1、2、3、5)、課題に対する探究力(同・6～8)、コミュニケーション能力(同・4、9～11)について、日常の授業でも実践しているディスカッションを通して評価が行われているということである。これは、デンマークの学力観および評価観について、(1)教育の目的、(2)学びの捉え方と測定方法、(3)教員に求められる役割、の3点が大きく関わっていると考えられる。

4. おわりに—デンマークの学力観および評価観に関する考察

1994年に制定されたフォルケスコレ法を概観すると、第1条第1項において、「学校は、保護者と協力して子ども一人ひとりの全人的な発達を促すため、子どもの知識、技能、学習方法、表現力を高めることを課題とする」と位置付けられており、同第2項では、「学校は、子どもの認識力、創造力、向学心を育成するために、体験および労働の機会を提供するように努める。それによって、子どもは自らの可能性を見出し自己判断力と自己行動力を習得する」と明記されている。

7～9学年対象の物理・化学の国家共通教育目標を見てみると、「冬季に道路に塩をまく理由を調査し、説明することができる」、「CO₂排出量に関する新聞記事に基づいて、地球温暖化への影響が説明できる」¹¹などと記載されており、日常生活において知識を用いてコミュニケーションを取ることが前提にされていることがわかる。学校教育で子どもの

どのような力を育むのかという目的と授業の在り方が、義務教育修了試験の実施方法に顕著に現れていると考えられる。フォルケスコールにおける授業は、子ども同士のディスカッションをメインに子どもの個性や学習能力に合わせて進められている。子どもに優劣をつけるために点数をつけるのではなく、教員が子どもの理解度を把握するために全国学力テストを行っていることや、義務教育修了試験では試験官とのディスカッションによって、テスト問題について考えを深めて発言していくという、プロセスを含めて学力を測定する方法が浸透している。

教員の役割という側面に関わっては、教え方や教科書・教材の選定は各学校に一任され、授業の進め方は、子どもが主体的に考え、互いに協力しながら学習するという相互学習が採用されている¹²。そのため、教員はティーチャーではなくファシリテーターと呼ばれることがデンマークの特徴である。

教員養成プログラムの目標においても、学びの支援者としての教員の役割を見出すことができる。1998年行政命令82号には、(1) 教科および教育学に関する理論や、授業に活かせる実践的基礎を習得すること、(2) 理解面や実践面において協働することができるように、また、授業の計画、実施、評価を行なえるようにすること、(3) 教科的側面を含んだ課題研究を通じて、協働を通じて、また、教育的責任を担うことを通じて人間的成長を図ることができること、(4) 子どもや大人の学習に関わる取り組みに高い参加意欲を持ち、これに喜びを見出すことができること、という教員の役割が明記されている。教員の役割は知識を子どもに伝達することではなく、協働学習や課題研究を行うことに重点が置かれていることが評価観に影響していると考えられることができる。

石井英真による『現代アメリカにおける学力形成論の展開』（2011年、東信堂）では、アメリカのスタンダードに基づく改革によって推進されている学力テスト対策の「詰め込み」教育とは一線を画す、学力形成論における新たな展開である「教育目標の分類学（タキソノミー）」や「真正の評価」論などの、より高次の学力形成をめざす理論と実践が考察されている。ペーパーテスト主導の評価観へのアンチテーゼとしてアメリカを中心に実施されている「真正の評価」は、本研究の問題意識と根を同じくするものである。また、遠藤貴広が「G. ウィギンズの教育評価論における『真正性』概念—『真正の評価』論に対する批判を踏まえて—」（『教育目標・評価』2003年）で論じたように、「真正の評価」は大人が現実問題で直面するような課題に取り組みさせる中で評価することを志向している。しかしながら、アメリカではアカウンタビリティの名目によって、子どもの学びを限定的に捉えることが通例となっている。

一方、本研究で取り上げたデンマークは、アメリカと同様に学力テストを行っているものの、ハイ・ステイクスな性質はなく、教員による「見取り」に基づく評価が子どもの学びを測定する重要な鍵になっている。既述のWandall（2013年）による研究では、学力テストの目的は子どもの学びを測定し、教育改善のためにその結果を用いているという結論にとどまっているが、本研究は9年生対象の義務教育修了試験を研究対象に含めたことで、学力観および評価観について一歩踏み込んだ議論を展開することができた。本研究は、子どもが身につけるべき力と測定方法を再考する必要性を示唆している先行研究に、新たな知見を提供するものである。本研究を今後さらに深めていくことによって、教育評価の研究の蓄積に寄与したいと考えている。

注

- 1 松下佳代「コンピテンシーを中心とする能力概念の検討」教育目標・評価学会編『「評価の時代」を読み解く(下巻)』日本標準、2010年、pp.32-41、および「学習の質を評価する—パフォーマンス評価の考え方と方法—」『京都大学高等教育研究』第18号、2012年、pp.75-114.
- 2 梶田叡一『教育における評価の理論 I 学力観・評価観の転換』金子書房、1994年.
- 3 L. M. Spencer Jr., and S. M. Spencer. (1993) *Competency at Work*, John Wiley & Sons.
- 4 Jakob Wandall. (2013) “Education, Testing, and Validity: A Nordic Comparative Perspective” *Validity and Test Use: An International Dialogue on Educational Assessment, Accountability and Equity*, 2013, pp.137-161.
- 5 Danish Ministry of Education. (2010) *Facts and Figures 2009 – Key Figures in Education 2009*, Statistical Publication No.2 – 2010, Danish Ministry of Education.
- 6 フォルケホイスコールは完全に無償ではなく学費の一部納入が必要であるが、大部分は国の助成金で賄われる。
- 7 任意科目として、第二言語としてのデンマーク語のテストが5年生と7年生で実施される。デンマーク教育省 <http://www.eng.uvm.dk/primary-and-lower-secondaryeducation/the-folkeskole/evaluation-tests-student-and-plans> (2018/10/01最終確認) .
- 8 <http://evaluating.uvm.dk> (2018/10/01最終確認) .
- 9 千葉忠夫『世界—幸福な国デンマークの暮らし方』PHP 新書、2009年、p.119、121.
- 10 Styrelsen for Undervisning og Kvalitet. (2018) *Vejledning til folkeskolens prøver I faget engelsk—9. klasse*. Undervisnings Ministeriet, p.7.
- 11 Undervisnings Ministeriet. “Fysik/kemi i 7-9 klasse.” <https://www.emu.dk/modul/fysikkemi-i-7-9-klasse> (2018/10/01最終確認) .
- 12 野村武夫『「生活大国」デンマークの福祉政策—ウェルビーイングが育つ条件』ミネルヴァ書房、2010年、p.188.

参考引用文献

- 文部科学省 (2017) 「世界の学校体系 (欧州) デンマーク王国」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/10/02/1396864_022_1.pdf (2018/10/01最終確認) .
- Dimova, Slobodanka. (2013) “National oral language assessment in Denmark: Where are we now and where are we going?” Presentation at the conference, *English in Europe: Opportunity or Threat*, Copenhagen, April 19-21, 2013.
- Skolestyrelsen (2010) “De Nationale test og Kommunen—brug af testresultater i kommunernes kvalitetsarbejde.” Styrelsen for Evaluering og Kvalitetsudvikling af

grundskolen, Kontor for afgangsprøver, test og evalueringer.
UNESCO Institute of Statistics. (2016) “Denmark: Education and Literacy.”
<http://uis.unesco.org/country/DK> (2018/10/01最終確認) .

Received : October, 3, 2018

Accepted : November, 7, 2018